

野谷竹路

川柳の 作り方



成美堂出版



野谷竹路^{のやたけじ}

大正10年東京生れ

(法政大学文学部国文学科卒業)

昭和16年、川上三太郎主宰(川柳研究社)

の幹事となり、現在、川柳研究社副幹事長、

足立川柳会会長、日本現代詩歌文学館振興

会評議員、日本川柳協会常任理事、日本川柳

ペンクラブ常任理事、川柳人協会理事(花

久忌担当)、東都川柳長屋連店子

よみうり日本テレビ文化センター川柳入門

講師、三越文化センター日曜川柳入門講師

著書、句文集『中学校の四季』

川柳の作り方

著者 野谷竹路
 発行者 深見兵吉
 印刷所 広研印刷株式会社

発行所

成美堂出版

〒112 東京都交京区水道1-8-2

電話(03)3814-4351 振替・東京7-4466

©Takeji Noya 1992

PRINTED IN JAPAN

ISBN4-415-07452-9

落丁・乱丁などの不良本はお取り替えます

●定価はカバーに表示してあります

川柳の作り方

野谷竹路

成美堂出版

イラスト トミタ・イチロー
デザイン 葦工房
装丁 熊谷博人

はじめに

新聞や雑誌の川柳欄に加え、最近では会社川柳とかサラリーマン川柳、またはビジネス川柳というような名前で、企業内でも川柳を募集するような傾向もあり、若い人たちの間でもだいふ川柳が身近な文芸として見直されはじめましたが、川柳はまだまだ正しくは理解されていない、多くの誤解と偏見の中にある文芸だと言えます。

戦前は古川柳ではありますが、川柳が教科書に教材として載っておりましたし、一般の出版物の数も現在と比べるとだいぶ少なく、特に広く読まれていた大衆雑誌や婦人雑誌には、漫画川柳が載っていたり、読者文芸欄には、詩・短歌・俳句と並んで川柳欄があったりしましたので、多少の誤解はあるにしても、川柳は割合身近な文芸として多くの人に愛好されていたわけです。

川柳は俳句と同じ詩型であるため、俳句のパロディだとする誤解が多いので、本書では歴史的な考察も加え、その辺をはっきりさせたうえで、川柳の作り方を読者と一緒に学ぶつもりで述べてゆきたいと思います。

正岡子規が、俳諧から新しい文芸として俳句をスタートさせましたが、それに十年ほど遅れて川柳も新しい文芸として出発し、時代と共に変貌しながら現在に至っていますが、身の

回りのものがすべて句材であり、自由に自分の思いを書くことができる文芸なので、自分史を、またはドラマを十七字で書いてみたらどうか。それが可能な文芸なのです。

多くの作品を読むこと、多くの作品を書くこと、そして、自分の作品をよく練ること、この三つは、どの文芸にも通じる上達の秘訣ですが、そのことを考慮して本書をまとめてみました。若い文芸、川柳に大いに挑戦していただくことを期待してはじめのことばとします。

はじめに 3

川柳の流れ

1 川柳のルーツ

松尾芭蕉の時事句 10

川柳も俳句も俳諧から生れた 13

連歌 15

俳諧 18

前句付 20

前句付の点者 23

万句合せ 24

柄井川柳の登場 25

『柳多留』の刊行 26

古川柳と江戸川柳 28

『柳多留』の作品 30

2

② 新川柳のスタート	35
------------	----

当時の作品	37
-------	----

阪井久良岐と井上剣花坊	39
-------------	----

新川柳のその後	41
---------	----

③ 俳句と川柳	45
---------	----

実作教室	47
------	----

① 川柳は五・七・五、十七音字の詩	48
-------------------	----

字余りは上五で	51
---------	----

② 川柳は身の回りのものすべてが句材	54
--------------------	----

川柳と自然	55
-------	----

身近な人間関係	57
---------	----

社会へ目を向けた句	60
-----------	----

③ 表現のポイントは句語の発見	63
-----------------	----

ことばの省略	66
--------	----

会話体の活用	69
--------	----

比喩のいろいろ	70
---------	----

明喩／70 暗喩／71 擬人法／72

4 いろいろな川柳……………74

雑詠(自由吟) 74

テーマ吟と連作 77

ユーモアのある句 80

時事川柳 82

年賀・年頭句 84

慶弔句と献句 86

課題詠 91

初心者が陥りやすい作句例 94

3 添削五十題……………97

名詞以外の課題詠 127

4 鑑賞教室……………149

1 戦後の川柳界をリードした六大家……………150

2 現代のおもな作家と作品 I……………159

5

句会・結社

③ 現代のおもな作家と作品 II	170
------------------	-----

④ 女性の川柳作家とその作品	186
----------------	-----

⑤ 私の川柳鑑賞	195
----------	-----

① 作句道場としての川柳句会	224
----------------	-----

② 川柳結社と発表誌	228
------------	-----

主要川柳団体	229
--------	-----

あとがき	230
------	-----



川柳の流れ

『川柳のルーツ』

松尾芭蕉の時事句

「宿々しゆくで咄はなしのかはる喧嘩沙汰けんぱさた」

宿場宿場で話に尾緒おひれが付いて変ってゆく喧嘩の話というだけの句だが、よくある噂話の伝わり方をズバリと言いつけています。

元禄七年の二月十一日に江戸の高田の馬場で、後に堀部安兵衛となった中山安兵衛が、伯父の果し合いの助太刀に駆けつけたが間に合わず、死んだ伯父の仇討ちをしたという話は、忠臣蔵の中の一つのエピソードとして有名だが、江戸幕府が開府して泰平がしばらく続いた元禄時代に起ったこの事件は、後の赤穂浪士の討入り程ではないが、当時の人にとっては結構ショッキングな事件だったと思います。

江戸で起ったこの事件が、三島、名古屋、大阪と拡がってゆくうちに、確か三人くらいが

斬られた話だったのに十八人斬られたことになり、後世、中山安兵衛、高田の馬場十八人斬りの仇討ちということになっています。

この事件のあった四ヵ月後の元禄七年六月二十一日に、大津の木節庵で、芭蕉翁を中心に惟然、支考と木節の四人で俳諧の歌仙を巻いていますが、その中の一句がさきにあげた冒頭の句なのです。

秋ちかき心の寄や四疊半

翁

が発句で、木節、惟然、支考と続け、

なにの箱とも知れぬ大きさ 然

宿々で咄のかはる喧嘩沙汰 翁

と付けた、芭蕉翁の作品です。

俳聖とも呼ばれる松尾芭蕉の作品というと季語の入った俳句を誰でも考えますが、このよ



宿々で咄のかはる喧嘩沙汰

うに当時起った事件を早速読み込んだ作品もあるわけです。交通機関が現在程発達していなかった元禄時代、四カ月前の事件はまだ最新の事件で時事句と言ってよいと思います。

もちろん、俳諧の中の付句ですが、現在の川柳のような作品も数多く芭蕉の作品の中からも発見できます。

川柳も俳句も俳諧から生れた

川柳は俳諧の付句を学ぶ方法として考えられた前句付から生れた文芸なので、俳諧に至るまでは、現在の俳句の成り立ちと同じです。ですから、俳句と川柳は俳諧という文芸から生れた同根の文芸と言つてよいと思います。

元禄十五年刊の鷺水の「若えびす」という俳諧書の序に、

「俳諧の稽古に付てさまざまの習ひあり、人の上中下根あるに随て、道に発句合前句付笠付あり、其器量に應じて其教る格も別也。たとへば、かいもくなる初心の人には、笠付を以て平句を仕ならはせ、一句のしたてやうを習はせ、さて少し功の行たる時、前句付を仕ならはせ、付はだへを覚えさせ、それも功の行たる時、発句合せさせて、句作のよしあしを知らする事なり——」

と俳諧初心の手引が述べられています。簡単に説明すると、俳諧の稽古には色々な方法があるが、人の能力には上中下があり、俳諧を学ぶ順序に発句合せ、前句付、笠付がある。その能力に應じてその教え方もいろいろで、例えば、まるつきり初心の人には笠付をさせて平句に慣れさせ、一句の作り方を習わせ、少しでもできるようになった時、前句付をさせて付け方を覚えさせ、それもできるようになったら、発句合せをさせて、句作のよしあしをわからせた

い、ということです。

笠付は現在も冠句として行なわれている文芸の一形態で、五文字題に七・五と続けて、十
七字の句を作るもので、例えば、「新らしい」と言う題に対して、

新らしい 家風は嫁が来て作り

新らしい ビルが高さを競い合い

というように独立した一句を作らせ、五・七・五のリズムに慣れさせるのです。

前句付は、七・七、または、五・七・五の題を出し、それに続く五・七・五、または七・
七の句を作り、俳諧の付合せの練習をするもので、連歌の発生そのものに近い形式でもあり、
川柳はこの前句付から生れたのですが、具体的には後段で述べることにします。

発句合せ 俳諧の勉強法の最後に取り上げられる発句合せとは、簡単に言うところ現在の俳句
のことです。俳諧の一番最初の句を発句はつくと言ひ、この句をスタートにして五十句、百句また
は三十六句と、五・七・五と七・七の句が交互に作られ、最後の句、挙句あげくで終るわけです。
スタートである発句は、挨拶の句でもあり、その良し悪しが、句の流れにも影響するので、

俳諧をするうえで最も重要な句とされ、これを学ぶことによって、俳諧の座に参加することができるようになるわけです。発句には季節を表わすことばが必要であり、また、一句として独立するため、切れ字が考えられ、これが現在の俳句にも引き継がれています。

そして、正岡子規が俳句という文芸名を生み出す以前は、一般的に発句という名称で作句されていました。

○

川柳も俳句も、俳諧から生まれたということは前述しましたが、これから俳諧について簡単に説明することにします。

「俳諧」は正しくは「俳諧の連歌」のことで、連歌を俳諧風に仕立てたものなのですが、連歌を省略して、俳諧と呼ばれるようになったものです。そこで、連歌についてのあらましましを述べてみましょう。

連歌

連歌は、一首の和歌を、上の句と、下の句との二つに分けて考えるようになって、はじめて発生した文芸で、短歌の上の句と下の句を別人が作って、唱和したものです。最古のものとして、